

やっと、

アマテル神の誕生日を
西暦(太陽暦)年で計算
できました。

副題

簡易版

ホツマツタエ暦の解説書

古代日本は、いつから始まったのか？



ホツマツタエ史学研究会

吉田六雄

やっと、
アマテル神の誕生日を
西暦(太陽暦)年で計算
できました。

副題

簡易版

ホツマツタエ暦の解説書

古代日本は、いつから始まったのか？



ホツマツタエ史学研究会

吉田六雄

はじめに

本書は、過去約 32 年間に渡り、ホツマツタエ暦(スス暦、アスス暦を云う)を研究、解読した解説本になります。

そのホツマツタエにはハラミ山(富士山)のハラミ宮で誕生されたアマテル神の穂(年)をスス暦の「21 鈴 125 枝 31 穂初日ほのぼの」と記述しております。また、22 鈴と 36 鈴には 2 個所の望(満月、月令 15 日)も記述されていた。時として私は約 32 年前に満月の再現に注力し、日本の起源を解明すべくホツマ暦の研究を始めました。

最近の結果は、ホツマ暦を西暦に換算する式が複数完成し月令を計算すると、22 鈴(紀元前 320 年)は 13.8 日。36 鈴(紀元前 223 年)は 14.3 日に再現しました。

注目のアマテル神誕生日も紀元前 334 年 1 月 10 日に計算されました。精度は 1 日と 10 日の 9 日違いです。

アマテル神の誕生と最古の望(満月)の再現と証明

1、ホツマツタエ暦と西暦年代



2、スス暦の満月

1鈴1穂	22鈴505枝	36鈴34枝
月令 15.5日	3月9日	11月8日
月相 	13.8日 	14.3日 
186°	165°	172°

目次

はじめに

アマテル神の誕生と最古の望(満月)の再現と証明

目次

日本人の疑問	11 頁
1955 年(昭和 30 年)頃に聞いていた日本の起源(風聞)	
日本の起源(風聞)	
小学校の社会の授業	
日本書紀の天皇の崩御歳	
古代への疑問の始まり	13 頁
1991 年(平成 3 年)延岡、宮崎へ	
日本の起源は、なぜ「宮崎」か	
九州より帰郷	
ホツマツタエとの出会い	
奈良時代～明治時代の紀年議論	17 頁
神武天皇元年は、シナ(支那)暦で議論されていたが、	
紀元前 660 年の議論はなかった	
江戸時代以前	
抜粹例 1343 年改訂、神皇正統記	
	19 頁
明治の改暦に協力した那珂通世 2 倍暦を糺せなかった	
上世年紀考	
辛酉革命の事	
国史と韓史と紀年の比較(上世年紀考より抜粹)	
書紀紀年の延長	

コメント	
昭和、平成の議論	23 頁
欠史八代、2 倍暦、考古学	
欠史八代、2 倍暦、考古学	
ホツマッタエとの出会い 平成 6 年 3 月	25 頁
天神、天皇、臣らの年齢	
天神、天皇、臣らの年齢	
スス暦の御世	
スス暦～アスス暦の御世	
アスス暦(28-65)の御世	
改暦	
年齢	
ホツマツタエ暦は、どの様に解読されたか	29 頁
ホツマツタエ暦	
スス暦	
太陽暦の確認	
スス暦の「一日」	
2 件目「21- 64 アエよりヤエの中五日守お離れて」	
1 件目「4- 39 天の原十六穂居ますも一日とぞ」	
応用	
ホツマツタエの暦日表記	33 頁
暦日表記	
望(満月)の表記	
スス暦の御世臣らの在位年数	35 頁
臣らの在位年数	

在位年数基準となる就任年と離任年の求め方

オオヤマズミ、オオモノヌシ

初代クシキネ

在位年数の計算

コメント

四代カンタチ

在位年数の計算

コメント

3.2 倍も長かった一因

四代カンタチの真の年齢

スス暦の御世太陽暦での在位年数 41 頁
初代クシキネ、四代カンタチ

スス暦の御世アマテル神の年齢と発生年が 97 年違う
二つの満月の検証 43 頁

太陽暦でのアマテル神の年齢

アマテル神、天神としての在位年数

コメント

発生年月が 97 年違う二つの満月の検証

二つの満月の再現

神話時代の二つの満月の記述

検証手順(方法)

検証式と結果

コメント

スス暦から西暦への換算誤差の検証

古天文学月相プログラムによる月相計算式

紀元前 320 年 3 月 9 日の月相プログラム事例

アスス暦の御世年齢	59 頁
アスス暦の年齢表記	
年齢	
アスス暦の暦日表記	
抜粋された暦日	
アスス暦の再現精度	
1 年 385 日の再現式	
1 年 265 日の再現式	
アスス暦 日エトの再現結果 表(1 年 385 日)	
アスス暦の一年の日数	
コメント	
日本書紀暦日原典	
天皇の高齢化原因が判明する	65 頁
ホツマツタエ	
スス暦～アスス暦の御世で生きたワニヒコ	
経歴	
コメント	
ホツマツタエの自然科学	
春の記述	
アスス暦表 即位年 季節、月日	
コメント	
日本書紀の自然科学	
春の記述	
『日本書紀(引用:朝日新聞本)』	
コメント	
ホツマツタエ、日本書紀	
天皇の崩御歳段差より見える書紀暦の改暦史実	

1代～33代天皇の崩御歳 推移棒グラフ
下図・上線・・・1代～16代天皇の崩御歳
下線・・・同代天皇の崩御歳の2分1の歳
ホツマ、日本書紀、新皇正統紀の天皇の年表
コメント

アスス暦、日本書紀暦2倍暦の証明 73頁

不知火編

満月編

不知火を題材にして、2倍暦を証明する
近代暦(新暦)により「8朔の不知火」の再現
景行天皇が見た不知火
アスス暦(旧暦)を2分1暦に改暦し再現する
段取り
検証(変換)方法
計算結果
西暦779年に於ける暦の変換方法

古天文学での新月の再現

紀元243年前後の旧暦8朔と新月の検証結果
紀元243年前後の旧暦8朔と新月の関係表
コメント

満月を題材にして、2倍暦を証明する

アスス暦の望(満月)の記述
11カ所の望(満月)の再現
計算結果
儀鳳暦
アスス暦
コメント

スス暦、アスス暦、日本書紀暦作成された
古代史年表 79 頁

古代史年表の作成

新古代史年表(概要)

スス暦の初年

アマカミ(天神)

スメラギ(天皇)

古代史年表の解説

ホツマツタエの年表

【縄文時代】

【弥生時代】

【弥生時代】

【古墳時代】

日本書紀の年表、注記

スス暦⇒太陽暦⇒西暦換算(ホツマ記述解釈更新)

新換算年の概念 (2026_1_16 更新)

旧換算年の概念

新換算年表

2つの満月(180°)の再現

旧換算年表

アスス暦⇒スス暦⇒太陽暦⇒西暦への換算

スス暦、アスス暦変換年代と考古学年代の比較 87 頁

スス暦・アスス暦西暦変換年代と考古学年代比較

主な比較年代

【縄文・晩期】

【弥生・中期】

【古墳・前期】

スス暦・アスス暦の西暦変換年代と考古学年代の比較図

スス暦のゾロ(イネ)初見年代と考古学の稲作開始年代の対比 89 頁

国立歴史民俗博物館(以下「歴博」)の発表(引用)
「AMS-炭素 14 年代測定法」稲作伝来地区と年代表
ゾロ(イネ)のホツマツタエの記述
稲作の開始とスス暦、アスス暦、日本書紀暦の年代
コメント

結論 93 頁

総合解説

やっと、アマテル神の誕生日を太陽暦の西暦年で
計算できました。

古天文学との出会い

古代の満月が記述されていた暦

古代の満月までの年数を算出する元暦の検証

神話時代のスス暦、天皇前期のアスス暦、天皇后
期の日本書紀暦の暦の性質(暦法)

ホツマに記述の満月の再現性について、元暦、解明
式での検証

評価条件

古代の満月が証明したアマテル神生存説

アマテル神の誕生日

ホツマツタエ文章の解釈の修正(吉田説)

解釈の相違点の明記

1、従来の解釈

2、ホツマッタエ本来の解釈

西暦年代への変換されたアマテル神の生まれ日

西暦年代への換算年代

アマテル神の生まれ日の裏付した満月の検証方法

アマテル神の生まれを紀元前 334 年 1 月 10 日とする説は、正しいか。

2ヶ所の満月の再現結果

記述の 3 月に対し計算値の 11 月になる根拠

考察

結論

本書のホツマ用語 103 頁

参考文献 119 頁

ホツマッタエ研究沿革

日本人の疑問

1955 年(昭和 30 年)頃に

聞いていた日本の起源(風聞)

日本の起源(風聞)

1955年(昭和30年)頃は、敗戦より10年経った頃である。だが、まだ、まだ、戦前の風潮が残った頃であり、神武天皇元年(紀元660年)が、日本の起源と聞いていた。

小学校の社会の授業

当時の先生は師範学校を卒業されており、社会の授業で日本の歴史を習っていた。

先生曰く、「日本は神武天皇が建国された」、仁徳天皇の御世の話では、「天皇が高い山に登られた所、夕食時に竈の煙が登って無かった。そのため、暫くは税を免除された。後日、高い山より竈の煙を見せれた天皇は安堵された。」とのことであった。

日本書紀の天皇の崩御歳

神武天皇は127歳で崩御され、他の天皇も100歳以上と聞かされていた。だが、当時は、高齢の天皇の年齢と聞かされても、疑問を検証する総べを知らなかった。

古代への疑問の始まり

1991年(平成3年)延岡、宮崎へ

日本の起源は、なぜ「宮崎か」

私の古代への疑問の始まりは、1991年(平成3年)に遡る。この年の前後は、俗に云うバブル景気であった。そのため私どもの職場でも臨時の人事担当として、地方の職安に出張していた。私の担当は、2月9～10日にかけて、であった。出掛けた職安は、延岡、宮崎であった。そんな中「古代への疑問の始まり」になった「ニュース」は、今でも鮮明に残っていた。2日目の宮崎のホテルでの一室、夜七時からのニュースは、高千穂町での建国日の「神楽の舞」や宮崎神宮での「建国記念日」の行事様子を撮し出していた。私は不思議に「神楽の舞」や「建国記念日」が、「なぜにこんな九州の片田舎で行われているのだろうか？」と疑問を持ってしまった。

私の疑問の一端になったのは、私も実は、九州出身であり、私の古里は、長崎県島原市である。宮崎と島原の距離はそんなに離れてなく、島原から宮崎までの道中は、熊本県、次に宮崎県になる。その九州、島原出身の私でさえも、宮崎が古代の始まりとは、初めて聞いた話であった。まして「神楽の舞」や「建国記念の日」の起源の地が宮崎県にあったとは、露程も知らなかった。

このことは私だけでなく戦後生まれの人たちには、「古代の日本」のことは知らないで育ってきた。突如として見聞きし「神楽の舞」や「建国記念の日」が行われる「宮崎の地」が、日本の古代地であり「神話の里」であったとは思っても寄らなかった。

九州より帰郷

横浜に帰った私は古代史の入門編を買い漁り「古代日本について」多くの情報、資料より、古代のキーワードを特定すると、「神話時代、天皇の御世、縄文時代、弥生時代、遺跡、考古学、オパールプラント、及び、年代測定法など」列記すると切りがない。

だが、そのキーワードの中にさえも、私が目指す「古代への疑問の始まり」、延いては、「古代日本は、いつから始まったのか？」への答えが見つからない。それも 答えの正解は、古代のスタート点まで「暦日で遡れないか？」であった。

そんな中、30冊を読んだ頃の1994年早春(平成6年)に、ふと「ある歴史家」と「一冊の本」で遭遇した。

ホツマツタエとの出会い

会社帰りに、いつものように、横浜市緑区川和の古書店を訪ねた。すると、今まで目にしたことない「ホツマ ツタエ」と云う名の関連本を手にした。速読して見ると、神話時代より暦で記述されていたが、その暦日は太陽暦、太陰太陽暦の記述でなく、1,730,000年等と特異な年代で書かれていた。

だが、不思議に記紀文献にない古代暦臭を感じ、これが本物の日本古代史文献かと思え購入することにした。

本書のホツマ用語

ホツマツタエ

ヲシテ(古代文字)で作成された神代、上代の歴史書の一書。漢字の表記を嫌うホツマツタエ研究者もいるが、ホツマツタエを江戸時代に写本して残した安聰の漢字訳は、秀真政傳紀である。

ホツマツタエの年代

ホツマツタエ暦の解読にわり、年代的には紀元前 6 世紀～紀元 3 世紀になる。

ホツマツタエとは、

『ホ』

国常立の八子の御子の一人であるホ君(クニサッチ)が起源。

『ツ』

数助詞の「個」、一国の意味。

『マ』

間の意味である。

『ツマ』

複合の意味で「端」となる。

『ホツマ』

ホの国の端と記述され国の大きさを著した語句。

日本書紀には「シワカミ(磯輪上)のホツマ国」の記述があり、ホツマ国は関東から日高見までの大きな国であった。『ツタエ』は、言い伝え、伝説の意味の「伝」である。その「ホツマ」国の伝記に由来する伝えがホツマツタエ文献であった。

ホツマ国

ホツマツタエの記述によれば、神話の時代の天御祖神、天御中主、国常立に続くクニサツチの八人の皇子の内、「ホ」の皇子が建国したと云う「ホツマ」国を云う。

秀真政傳紀(復刻本)

和仁枯安聰が写本した本をホツマ研究者が出資し、写真撮影し原版に作成した本。

御機の初、御機之二、御機之四

ホツマツタエ四十アヤ(文)の内の、一、二、四アヤ(文)のこと。

スス暦

筆者(ホツマツタエ研究家 吉田六雄)の造語である。古代暦法で作成された日本の最古の暦と思われる。初年は1 鈴1 穂が推定され、21 鈴はアマテル神の誕生した鈴である。

エト

エトの一音節語では、エは(兄)で、トは(弟)の古代語である。

ホツマ・エト

和製の干支のことで、五音、六音、二音の組み合わせで出来る干支である。それに対し中国渡来の干支は、十干十二支の組み合わせからなる干支である。本来は「表六十と裏六十の百二十」からなる干支である。通常は表干支を持って干支としている。

穂

スス暦

スス暦を数える最少単位。エトを数える古代数字の単位。ホツマツタエは、五七調で記述されるため、一音字は「ホ(穂)」、二音字は「トシ(年)」と記述される。一日の $1/16$ 、 $1/8$ の値である。

ホ(穂)

ホツマツタエ文は五七調で書かれ、二文字の場合は「トシ(年)」、また、一文字の場合は「ホ(穂)」で記述されている。意味は、ホツマ干支表の60分の1を穂と称する。スス暦の穂と一日の関係は、16穂で一日、また、約28鈴～において16穂で二日である。そのため、太陽暦の年とは違う。

枝

穂を一～十まで集めて、位上りさせた単位を「枝」と称する。

鈴

枝を一～千まで集めて、位上りさせた単位を「鈴」と称する。

真賢木

サマカキと読む。古代の木的一种。但し五十鈴で枯れて現在では見るができない。また種を蒔いてスス苗を植えたとの記述もある。

天の原 十六穂居ますも 一と日とぞ

【解釈】

スス暦が始まった当初より、「一日は十六穂」で数えていたと判明。(吉田説)(2011年4月16日発表)

アエよりヤエの中五日

【解釈】

(仮)二十七鈴以降は、「一日は八穂」に改訂。このため、一鈴～約二十七鈴までに比較し、一日を二日に計算した年数になっていた。(吉田説)(2003年6月14日発表)

マサカキ

芽がでた時は「スス苗」とも呼ばれる。枝を持つ木と記述されている。

マサカキ暦

マサカキの枝の伸びを元にした暦と記述されている。一方この暦の解釈が進むと、「ニエト・キアエより枝と穂と数え」の文のように、マサカキの枝ま数えより離れ、ホツマ・エトの60表が構築され、ホツマ独自に暦が進化して行くことがわかって来る。

六万年

「ムヨロ年」と読む。「ニエト キアエより 枝と穂と数え」で、ムヨロ年になると、次の鈴に位上がりする最後のエト。

二十一の年

「フソヒの年」と読む。この頃の年はワカヒト(アマテル神)が、生まれた頃になる。

百二十万七千五百二十

「モ(オ)フソヨロナチキモ(オ)フソ」と読む。この頃の年はワカヒト(アマテル神)が、生まれた頃になる。

二十一 鈴百二十五枝年キシエ

「フソヒスス、モフソキエ 年キシエ」と読む。ワカヒト(アマテル神)が、生まれた年を云う。

日高見

常世国の国常立より、国常立の国守であった常世神の子供のハゴクニ神が賜わった国。場所は常世国の東の国になり、福島・勿来～宮城にあった国。五代のトヨケ(豊受)は、ヒタカミの「東の君」と云われた。子供のイサコは後に、嫁いでイサナミになる。

二十六 鈴

「フソム鈴」と呼ぶ。

三十二 鈴

「ミソフ鈴」と呼ぶ。

日読み

毎日の月の様子を見て、暦の作ること。「日を読む」

天二重

スス暦からアスス暦に変わり、一年の内に、半年毎の二つの暦があったことを指す。

スス暦

ホツマツタエの記述見ると、一日の数え穂が「一日は十六穂」から「一日は八穂」に改暦された記述があった。このことを長年に渡り研究すると、「天の原 十六穂居ますも 一と日とぞ(一日は十六穂)」に対する「アエよりヤエ の中五日(一日は八穂)」の御世は、一日を二日に計算される「年、月」の経過日数になっていた。

大きな暦数字

筆者(ホツマツタエ研究者 吉田六雄)の造語である。古代に伊勢神宮に祭られている「トヨケ」が、キ(東)の君(日高見)と称えられていた頃のスス暦の表示に「二十一の鈴の 年すでに 百二十万七千五百二十に」があり、ホツマツタエを読み下して行く際に、この百二十万七千五百二十を「大きい暦数字」と命名した。

日エト

ホツマツタエの「スス暦」、「アスス暦」の暦日を証明するため、年月日の年、日に裏付けされる「エト」を指し、暦日計算名に用いた。

十六穂

語源は「天の原 十六穂居ますも 一日とぞ」であるが、アエ、ヤエの法則(吉田説)よりスス暦の一日を再計算すると、「一日を十六穂で数えていた」ことが証明され、スス暦の初年～(仮)二十七鈴頃まで運用されていた。「古代の一日は、十六穂で数えていた」とする説は、吉田説である。

八穂

アエ、ヤエの法則(吉田説)よりスス暦の一日を計算すると、「一日を八穂で数えていた」。スス暦の(仮)二十八鈴頃初年～五十鈴まで運用されていた。「アエからヤエの中五日」。「古代の一日は、八穂で数えていた」とする説は、吉田説である。

五十鈴

スス暦の最後の「鈴」年のこと。伊勢の「五十鈴川」は、スス暦があったことが裏付けられる。

スス暦の暦法

スス暦の暦法は、鈴枝穂、月日、季節、月相で成り立っていることは、ホツマツタエに記述されている。そして、長年分析したが、鈴枝穂と月日、季節、月相の相関関係が解読できなかった。

スス暦の解読暦法

ホツマツタエの記述に、一日と穂の関係が見出された。その一日の穂は16穂、または、8穂で刻んでいたため、太陽暦の一日と相違ないことが判明したため、スス暦を太陽暦として解読し本書の年代に採用した。

天の原

アマキミ(天君)が在籍される地域。古代の政庁。
高間原と同意語。

アスス暦

アマノコヤネが命名した暦名である。スス暦の次の暦である。

アスス暦

アスス暦の御世(神武天皇)以降は、五十八穗(年)などとして年の単位に使用されているため、前任の研究者は、スス暦の御世でも年と思っていた。そのため、アマテル神の年齢の記述で「いやとよわれは民のため苦きお食みて百七十三万 二千五百お 永らえて」を鵜呑みしていた嫌いがあった。アスス暦の穂は、2 倍暦の穂年である。

アスス暦の暦法

ホツマツタエに記述される暦日、年月日、季節より解読すると、太陰太陽暦が再現した。だが、ホツマに記述される天皇の崩御歳の約 60%が 100 歳以上のため、近代の太陰太陽暦ではなかった。

アスス暦の太陽暦

アスス暦の一年約三百八十五日と一年約二百六十五日を組み合わせると、現在の太陽暦に相当する暦が隠れていた。(吉田説)

アスス暦の暦日解読(計算三八五)式

アスス暦を旧暦の太陰太陽暦と対比するため、アスス暦の暦日の 21 個より丹念に計算しますと、一年は約三百八十五日で成り立つ、一次方程式ができます。この一次方程式より再現される月暦を云う。(吉田説)

アスス暦の暦日解読(計算二六五)式

一年約三百八五日は一年約三百六十五日(太陽暦)より長いと、他の暦日が隠れていないかと丹念に計算を繰り返しました。

すると、同じアスス暦の暦日の二十一個よりに計算しますと、一年は約二百六十五日で成り立つ、一次方程式がも発見されました。この一次方程式より再現される月暦を云う。(吉田説)

アスス暦の太陰太陽暦

日の裏付けとなるエトを基準に数学的に計算した暦であって、十九年間に、約三百八十四日(十三月)を十三年(回)と約三百二十四日(十一月)を六年(回)を組み合わせさせた暦を云う。(吉田説)

【アスス暦が2倍化暦であった根拠】の記述 三八アヤ(綾)三～五

景行天皇の2年弥生(三月)のことです。吉備津彦の女(娘)が立たれて正皇后になりました。名前は、播磨のイナヒオイラツ姫です。姫は、内待(副皇后の位置)の時に生まれ、去年(初穂)ウ(四月)に妊みて十月(十ヶ月目)に生まれず、フソヒ(二十一)月も経て、二穂の師走(十二月)望に…双子を生む(お生みになりました)。

双子の兄の名はモチヒトのオウス皇子、弟の名はハナヒコのコウス皇子と云いました。

【解説】

ヤマトタケこと、ハナヒコのコウスが、生まれた時の記述です。母であるイナヒオイラツ姫は初穂4月に妊まれて、十月十日の出産予定月は二穂(年)一月だったので。だが、予定月になっても生まれず、二十一月も経つた二穂の師走(十二月)の望に、双子を生みになったとの記述です。

アスス暦

スス暦(二十八鈴以降)は、二倍暦であり、アスス暦も改暦された記述はなく、二倍暦が継続していた。

アスス暦の解読暦法

神武天皇～33代までの天皇の崩御歳をホツマツタエ、日本書紀、新皇正統紀より抜粋すると、16代履中天皇元年前後の崩御歳に段差が見られた。また、15代天皇の頃に隣国より暦が伝来した形跡があり、改暦された形跡が見られた。このため、日本書紀の太陰太陽暦を2分1暦に変更し本書の年代に採用した。

日本書紀暦日原典

内田先生が話纂された日本書紀の暦日計算書で、西暦四百四十三年の元嘉暦、六百六十三年の儀鳳暦を元に、古代日本の暦日を計算された本。但し、中国での使用は、元嘉暦、儀鳳暦の順であるが、日本書紀の暦日の証明の確率から見ると、儀鳳暦、元嘉暦の順になり、日本書紀の暦日が後世の作と思われる。

ホツマツタエの暦日の約三百個所について日本書紀暦の暦日と比較すると、一致率は約53%である。誤植でなく明らかに相違する個所が四ヶ所ある。

アマテル神

幼名、ウヒルギ。諱、ワカヒト。後にアマテルと云う。

太陰太陽暦

旧暦と呼ばれ、月暦の月数に閏月を用いて、季節のズレを最小限にした暦。

ニニキネ

諄、キヨヒト。アマテル神の孫。日本書紀では、高千穂に「天孫降臨」した時は「赤ん坊」としているが、ホツマツタエを読むと、今の関東平野を開拓したり、高田に稲田を作らせたり、富士山の八湖の湖底の底を竣工させたり、九州の筑紫平野や宮崎平野など稲田を作らせるなど、活躍された天君である。そして最後に、高千穂の峰に神上がりされた。

タケヒト(神武)スメラギ(天皇)

諄、タケヒト。アマテル、オシホミ、ニニキネ、ホホ デミ、タケウガヤフキアワセズを祖先とする天皇であり、スス暦の解説が日本書紀など編纂当時にできなかった。アスス暦の御世になり古代日本の暦日が解説可能になったため、日本書紀など取り入れられ、アスス暦の最初の天皇である神武天皇が初代天皇として、日本書紀などに記録されるに至った。

ヤスギネ(綏靖)スメラギ(天皇)

諄、ヤスギネ。神武天皇の次の第二代天皇。

月相

「お月さま」の状態を、暦に取り入れて、その日の月の状態を表す単位。

朔望月

月暦や太陰太陽暦の一と月で、「朔日～次の朔日」まで。または「望(満月)～次の望」までを「単位」とする。

オシホミ

諄、オシヒト。アマテル神の長子。ホツマツタエでは、箱根で神上がりし、「箱根神」とされる。

古事記

七百一十二年に、太安万侶によって、献上された漢文調の歴史書。

日本書紀

七百二十年に、舎人親王らによって、編纂された漢文調の歴史書。

松本善之助

昭和のホツマツタエ研究の第一人者で、父的な存在である。千九百六十六年、自由国民社の編集長であった松本善之助は、神田の古書店で写本を偶然発見した。その後、三年間、漢学者の安岡正篤らの支援を受けて研究し、研究成果を支援者に講演した。のちに、全国のホツマツタエの勉強会の開催は、その時の延長であった。松本が発行した月刊「ほつま」は、初号(昭和四十九年二月)～最終号・二百四十九号(平成六年九月)までの約二十〇年の長きに渡り、発行し続けて、ホツマツタエの研究に一石投じた。その最後の門下生に筆者がいる。

オオタタネコ

諄、スエトシ。第三代大物主(コモリ神)の裔孫で、崇神天皇に大三輪神の斎主を賜る。ホツマツタエの二十九文～四十文の編纂者。

ハナギネ

ソサノオのイミナ(H)

ソサノオ

ハナギネの源氏名

オオヤマスミ系図(本項は中川氏より教えて戴いた。)

六代・・ヤマス(ズ)ミ、オオヤマス(ツ)ミ、谷のサクラウ
チ、タカヒト(イサミギ)のカガミの臣

七代・・オオヤマカグスミ

八代・・ヤマスミ、ヤマツミ、オオヤマスミ、カグヤマヲ
キミ、カグヤマツミ、エツノツマ姫の夫、コノハ
ナサクヤヒメの父君

九代・・カクヤマツミ

十代・・ミシマミゾクイ

オオモノヌシ

系図

先代・・ハナキネ、ソサノオ

初代・・クシキネ(大巳貴)、初代大物主

二代・・クシヒコ

三代・・ミホヒコ

四代・・カンタチ

五代・・フキネ

六代・・ワニヒコ、ホツマ 29~40 アヤの作者

天御子

天君の男子または、スメラギの男子を云う。

シナ暦

古代中国の暦で、本書では、儀鳳暦や元壽暦のことを指す。

儀鳳暦

中国で六百六十三年に採用された暦。(元嘉暦の採用は、四百四十三年)

キソサチのスメラギ(垂仁天皇)

諱、年ソサチ。第十代天皇。

カンヤマトイハワレヒコ

神武天皇の源氏名。ホツマツタエの二十九文は、神武天皇の初年より始まる。

天君

「アマキミ」と読む。初代天君は、ニニキネを指す。

時代考証

不知火

ホツマツタエの写本は、天安永4年(1775年)のものが最新である。古事記は712年、日本書紀は720年の編纂である。この三書について、自然現象である不知火の記述を見ると、「ホツマツタエは、あの火は何の火かと景行天皇が尋ねるが、知る者がいないため「不知火」と名付けた」と記す。「古事記も景行天皇が見た火の正体を知る者がいなかったため、「不知火」と名付けた」と記する。それに対しすでに到着地が判明したとして、「日本書紀は、景行天皇が不知火国に到着した」と記していた。この記述より、ホツマツタエと、古事記(712年)の編纂時

期が古く、また、日本書紀(720年)が遅い編纂であることが判明する。

八母音

奈良時代(710年)以前の日本語の母音は、「a」、「i」、「j」、「u」、「e」、「e」、「o」、「o」の八母音とのことである。一方、ホツマツタエのヲシテでは、ア(a)、イ(i、yi)、ウ(u)、エ(e、ye)、オ(o)、ん(n)の同じく八母音である。そして、八母音より見てもホツマツタエは、奈良時代(710年)以前の書物と云える。なお、ん(n)は、一説には、平安時代(794年)中期の出現とも云われる。

参考文献

ホツマッタエ研究沿革

参考文献

- 『古代日本正史・原田常春』
『上代日本正史・原田常春』
『気温の周期と人間の歴史(第一巻)・原田常春』
『気温の周期と人間の歴史(第二巻)・原田常春』
『ホツマツタエ文献秀真政傳記』
復刻監修 松本善之助 発売・新人物往来社
『ホツマツタエ写本(底本)』
・ 原卒中卒甲吉 秀真政傳紀(和仁古安聡本)
・ 原卒中卒甲吉 ほつまつたゑ上下(編著者 鎬邦男)
『複写本・ミカサフミ』(和仁古安聡写本)
『日本書紀・教育社新書・原本現代訳・山田宗陸訳』
『日本書紀暦日原典・雄山閣・内田正男編者』
『暦日大鑑・新人物往来社・西澤宥綜編』
『古天文学・恒星社・齊藤国治著』
『文献集不知火・不知火町』
他の参考文献、引用文献は本文に本名を記載しました。

筆者 吉田六雄(よしだむつお)

ホツマツタエ研究沿革

- 1994年3月 松本善之助(ホツマツタエを再発見)に師事
1996年 斎藤国治(古天文学)に師事
2000年 歴史研究本に論文「暦法で考える欠史八代」掲載
2018年 古代暦法「スス暦」長在年暦法「アスス暦」解説秘伝書
2020年 ワカ(和歌)姫～天の岩戸事件の解説(奉呈文～7アヤ)
2021年 和仁安聡本 ミカサフミ解説ヲシテ原文の現在語訳付
2022年 改訂版 フトマニの歌
2023年 改5 日の神(天照大御神)の誕生と新紀年の成立

やっと、
アマテル神の誕生日を
西暦(太陽暦)年で計算
できました。

副題

簡易版

ホツマッタエ暦の解説書

古代日本は、いつから始まったのか？

発行所　　ホツマッタエ史学研究会

2026(令和 8)年 3 月 20 日 改 10

著 者　　吉田六雄

発行人　　吉田六雄

編集人　　吉田六雄

